

研究ノート：《始まり》という「帰郷」 ——アーレントとドイツ（1）

矢野久美子

はじめに

1930年代にナチス・ドイツから脱出し、アメリカ合衆国に移っていた多くの亡命知識人たちは、戦後、みな多かれ少なかれ「帰郷」の問題に直面した。復興しつつあるヒトラー以後のヨーロッパに帰るか、それとも10年余り暮らしてきた新世界にとどまるか。選択の針は、年齢や家族構成、アメリカでの地位、英語の習熟度など、それぞれの個人的事情により、振れ方が違った。スチュアート・ヒューズは、母語からの切断という苦痛を味わった著述家たちが抗いがたい力によって故国へ引き寄せられ、最終的な決断に達するまでには幾度も大西洋を往来して躊躇していたと書いている⁽¹⁾。冷戦とマッカーシズムは帰郷を促す大きな要因のひとつとなった。「アメリカ版ファシズムの恐怖が、帰郷を躊躇っていた多くの人びとに最後の一押しを加えたことは明らか」である、という。

たとえば、マックス・ホルクハイマーとテオドール・アドルノは、それぞれ1949年から1950年にかけてフランクフルト大学に戻り、「社会研究所」を再開させた。カール・レーヴィットは、1952年にカール・ヤスパーズの後任としてハイデルベルク大学教授となった。トーマス・マンのように、ドイツそのものではなく、チューリッヒなどのドイツ語が使われるヨーロッパの他国の街に「帰郷」した者もいた。ヘルベルト・マルクーゼやジークフリート・クラカウアー、エリック・エリクソンは、合衆国にとどまった。

ハンナ・アーレントは1953年に、「民主主義をイデオロギー的な意味での〈大義〉に仕立て上げる」傾向に警告を発し、「先入的な思想によって〈アメリカをもっとアメリカらしくしよう〉とか、民主主義の模範としようとしても、それを破壊することになるだけだ」⁽²⁾と書いた。彼女は、「破壊活動分子」である共産主義者の「市民権剥奪」に直面して、「市民権の剥奪は、人類にたいする罪に数えら

れる」と断言したのである⁽³⁾。そして、かつて共産黨員であった夫ハインリッヒ・ブリュッヒャーとともに、1年あまりを恐怖のうちに暮らさなくてはならなかったようだ。他方で、「残ったものは言葉です」というあまりに有名なフレーズにもあるように、ドイツ語という母語のかけがえのなさを率直に表明してもいた。彼女は1949年に戦後はじめてヨーロッパを訪れた後も、生涯にわたって何度も大西洋を往復している。ヤスパースをはじめとする旧友との関係も復活し、1948年には戦後はじめてドイツ語で自著を上梓する機会を得た。くりかえされる旅のなかで、ドイツでの新しい友情を培ってもある。しかし、アーレントはドイツの大学からの誘いには一貫して応じようとせず、市民としては、合衆国で生きることを選択した。

アーレントは、さきに挙げた亡命知識人たちとは違って、ドイツを離れた時点では、まだほとんど名前を知られてはいなかった。じっさい、ドイツ語版の『全体主義の起源』が1955年に公刊されるまでは、アーレントが戦後ドイツ語で出したものといえば、ヤスパースやドルフ・シュテルンベルガーが1945年に創刊し、1949年まで存続した『ヴァントルンク』のためのエッセイが九つと、『モーナート』や『ノイエ・ルントシャウ』などに掲載された六つの論考のみである。

彼女は、1933年に友人たちのナチスへの同調を目撃した。そのために、「知識人の社会とは二度とかかわりをもたない」と決心してドイツを離れたのである。パリでの亡命生活中はユダヤ機関で働き、アメリカ合衆国に移った後も、一から学んだ英語で新聞や雑誌に時事的論稿を書きながら生活した。そうしたアーレントにとって、ドイツ語は夫や友人との親密な空間で語られる言葉であったとしても、公的には奪われた舌だったといえるだろう。「けっして起こってはならなかった」出来事である「アウシュヴィッツ」が、「どのようにして起こりえたのか」について思索しつづけ、1948年のシュテルンベルガーあての手紙では「ドイツにたいして恐怖心がある」⁽⁴⁾と述べたアーレントは、どのようなあり方で「書くことによる帰郷」⁽⁵⁾をなしとげていったのだろうか。そして、それはアーレントの思想とどのように結びあうことになるのだろうか。この研究

ノートは、そうした問いを模索する手はじめの作業である。

1 ヤスパースとの再会

ヤスパースは、「ドイツ」を政治的な概念としてではなく、「言葉、故郷、起源」としてとらえていた。かれは、1930年頃であったが、アーレントのことを「ドイツ人」と見なそうとしたことがある。ところが、アーレントはそうした扱いをきっぱりと拒絶している⁽⁶⁾。ヤスパースは、1933年のナチによる権力掌握がもっている深刻性を即座には理解していなかった。その証拠に、当時アーレントがかれに向かってどう行動するつもりか尋ねたときも、「すべては茶番劇だろう」と答えているにすぎない。彼女の亡命を耳にしたときも、「馬鹿なことを」とつぶやいたという⁽⁷⁾。しかし、そのヤスパースも、ほどなくして過酷な現実直面せざるをえなくなった。「われわれドイツ人は、突然監獄のなかにいることに気づいた」⁽⁸⁾。ヤスパースの妻ゲルトルートはユダヤ人だったが、ヤスパースが世界的に著名だったことから「特権的異宗婚」という範疇に入れられ、1937年頃までは出版活動や大学での講義を許されていた。しかし、政治的・知的に独立した発言をつづけていたかれは、ナチ化していた大学からは孤立し、1938年には公的発言を禁じられる。そして、数度の国外移住の試みも阻止され、なかば監禁状態でゲルトルートと孤独な生活をおくった。1945年4月14日には「最終解決」の枠で妻とともに収容所に送られることが決まっていたが、3月30日のアメリカ軍によるハイデルベルク占領によってすんでのところ悲劇的な運命を逃れることができた。

アメリカの占領軍駐留とともに赴任してきた「パルティザン・レビュー」の特派員に、メルヴィン・ラスキという人物がいた。ヤスパースは、かれの口からアーレントが生存しているという消息を聞き、すぐさまアメリカの軍事郵便を利用してアーレントに手紙を送った。1945年9月のことである。こうして、アーレントの亡命以来ほとんど音信不通であった師弟間の交流が再開されたのである。「わたしたちはあなたの運命はどうなったかと懸念し、あなたが生きているという希望もすでに長いこと失っていました」⁽⁹⁾と書いたヤスパースは、喜びを隠せなかった。そして、アメリカから送ら

れてくるアーレントの言葉に、「個人的な誠実さだけでなく、かぎりない慰めを与えてくれる偏見のない人間性の精神」が息づいていることに感激し、「それがどれほど稀少なものであるかを感じているから、あなたの手紙を読みながら涙が出てきた」⁽¹⁰⁾とさえつけ加えている。アーレントも、「お二人がすべての地獄をくぐり抜けてお元気でいらっしゃることを知ってから、世界がふたたび少しなじみのあるものになりました」⁽¹¹⁾と答える。他の友人にあてた便りのなかでも、ヤスパーズと接触がとれ、「人生の連続性、あるいは自分の感情がいくつものもっとも大事な点で維持された」⁽¹²⁾という感慨を手放しで表明している。

さて、問題は、こうしてひととおりの再会の喜びに浸った後、両者がそれぞれの境遇についてどのような自己認識と展望を抱いたのかということである。

まずアーレントは、1945年11月18日付の戦後最初の手紙で、自分の近況を説明していた。「お願いしておきたいのは、わたしが外国語で書いていること（それこそは亡命の問題なのですが）、12年来、精神活動のための静寂という言葉とは疎遠な存在となっていることを忘れないでいただきたいということです。わたしはフリーの著述家、つまり、歴史家と政治記者のあいだのようなものになりました。政治記者というのは、おもにユダヤ人の政治の問題にかんしてです」⁽¹³⁾。そして「9年前にドイツ人の男性と結婚しました」と報告する。

また、1946年1月29日付の手紙では、「いまだに無国籍」で「家具付きのアパート」に住んでいると書き、「大きな世界」に住むアーレントに素直に感心してしまうヤスパーズにむかって、「自分はけっして立派になったわけではない」と釘をさしたうえで、「ある問題にかんしては少しばかり権威になったから、信頼してください」⁽¹⁴⁾というのである。当時、ドイツ語圏で書かれたものの英訳版の編集や出版にもたずさわっていたアーレントは、以後、ヤスパーズたちの仕事をアメリカ合衆国で紹介する役割も担うようになった。

他方、ヤスパーズはどうだっただろうか。すでに示唆したように、ドイツのなかに新しい精神的支柱を立てるために、シュテルンベルガーやヴェルナー・クラウス、アルフレート・ヴェーバーたちとともに1945年に『ヴァントルンク』を創刊した。1949年まで続いたこ

の雑誌には、ベルトルト・ブレヒト、トーマス・マン、マルティン・ブーバー、ジャン＝ポール・サルトル、アルベール・カミュ、T・S・エリオット、W・H・オーデンなども論考や作品を掲載した。1945年12月2日付のアーレントに宛てた手紙に、ヤスパースはその第1号を同封する。それとともに、アーレントが『ヴァントルンク』に寄稿するように切望した。ヤスパースは、テーマを「アーレント次第」として、「ヨーロッパとアメリカの垣根をこえてわたしたちを結びつけるもの」、あるいは「今日のアメリカの哲学についての情報でもいい」と提案している。以下で述べるように、この点に関するヤスパースの発言は、そもそもアウシュヴィッツ以後ドイツ語で書く、ということについてアーレントが重ねていた煩悶の境地とはかけ離れたところから出てきているように見える。アーレントにとって、ドイツの雑誌に書くということは、けっして滑らかに進み出すわけにはいかない第一歩であった。また、アーレントは、アメリカの哲学について書くことができるような学究風的生活もしていなかった。とすると、まずここにある溝をこえることから、アーレントのドイツへの「帰郷」は始まらなくてはならなかった。

2 条件付きの「帰郷」

ヤスパースの申し出にたいする返事を、アーレントはつぎのよう
にきり出した。

たんなる生活人には解消されない、いいかえればわたしの文筆家としての存在は、わたしが夫のおかげで政治的に考え、歴史的に見ることを学んだということ、そして他方では、わたしが歴史的にも政治的にもユダヤ人問題の観点から見ることをやめなかったことに基づいています。そして、これが『ヴァントルンク』にかんするあなたの問い合わせへの、わたしの答えにかかわってきます。一緒にやろうというあなたのお誘いに、わたしがどれほど喜んだか申し上げなければならぬでしょうか？どれほど嬉しいか、簡単に書き送ることができます⁽¹⁵⁾。

アーレントは師の気遣いにたいしてまずは率直に感謝の気持ちを

述べている。しかし、ユダヤ人難民である彼女は、こう続けざるをえない。

ただし、こう申し上げてもあなたは誤解はなさらないと思いますが、ドイツの雑誌に協力することは、わたしにとってはいたって簡単とはいえません。ヨーロッパを去るというユダヤ人の絶望的な決意についてわたしが十分に悲しく思っていることは、お分かりでしょう（あなたはおそらく、ドイツの内外での難民収容所すべての雰囲気をご存知でしょう。そしてこれは決定的なことなのです）。わたしはまた、他の政府の態度や政治におけるわたしたちユダヤ人の自滅的傾向を目にするとき、さらなる破局、とりわけパレスチナでの破局の脅威に、言葉にできないほど怯えているのです。しかし、ひとつのことは明らかであるように思えます。もしユダヤ人がそもそもヨーロッパでとどまる可能性があるとしても、あたかも何事も起こらなかったかのように、ドイツ人やフランス人としてそうすることはできないと。わたしにはこう思われるのです。わたしたちが帰ることができないのは（そして書くことも帰郷のひとつのかたちです）、ひとがふたたびユダヤ人をドイツ人としてあるいはそういったものとして認めようと構えているように見えるからにはほかなりません。帰ることができるのは、わたしたちがユダヤ人として歓迎される場合にかぎられます。つまり申し上げたいのは、わたしがユダヤ人として、ユダヤ人問題の何らかの側面について書くことができるならば、よろこんで書かせていただきたいということです。そして、あなたからもし異論があるとして、それを措いても、現在の困難な状況のなかでそういうものを出版できるのかどうか、わたしは知らないのです⁽¹⁶⁾。

あたかも何事も起こらなかったかのように「ドイツ人」として「帰郷」することはできない、とアーレントは述べている。ヤスパーズはといえば、「言葉、故郷、起源」としての「ドイツ」を政治的範疇とは別のものだと語り、またそのことを信じてもいた。したがって、自分の弟子であるアーレントもまたそうした姿勢を選び取る知識人に属しているということを自明だと考えていたのである。だ

が、「ドイツ」はアーレントにとって、あくまでも自分の運命を左右し、母語を公的に使用することを奪った政治的範疇そのものであった。「書く」ためにはアーレントはやはりまずそのことを口に出さざるをえなかった。しかし、ユダヤ人として書くことができるならば「帰郷」したいと答え、1945年に『ジャーイッシュ・フロンティア』に英語で出した「組織化された罪」のドイツ語のオリジナル・テキストを同封し、それを『ヴァントルンク』に使ってもらってもよい、と申し出た。また、アメリカ哲学の紹介については、自分には知識がないといい、適任の人物を紹介している。

ことここに至って、ヤスパーズは問題の深さに気づかされる。かれは「〈帰還〉の問題にかんしてあなたの態度にまったく賛成する」と述べ、ユダヤ人として書きたいというアーレントの希望を受け入れるからである。すぐさま「組織化された罪」を『ヴァントルンク』に掲載する手配をした。同年のうちに「組織化された罪」(『ヴァントルンク』第1巻4号)と「帝国主義について」(同8号)、「フランツ・カフカ、再評価」(同12号))が続々と掲載される。1948年には、この三つのエッセイに「シュテファン・ツヴァイク——昨日の世界のユダヤ人」と「隠された伝統」、「実存哲学とは何か」を加えた『六つのエッセイ』と題する独立の小品集が、『ヴァントルンク』シリーズの1冊として出版された。そして、それにはつぎに紹介する「ヤスパーズへの献辞」が添えられていた。さらにアーレントは、同年の『ヴァントルンク』3巻第4号に「強制収容所」という論稿を、1949年の『ヴァントルンク』4巻秋号には「人権があるとすれば、それは唯ひとつ」を、同6号には「党と運動」を書く。この三つの論稿はのちに『全体主義の起源』に組みこまれることになった。

3 1948年「ヤスパーズへの献辞」

『六つのエッセイ』に添えられたヤスパーズへの献辞に注目したい。ここには、戦後はじめてドイツで出版することになったということに関する、いいかえれば「帰郷」に関する、アーレント自身の心境が非常によくあらわれている。もっとも、そのドイツ語がいかにも込み入ったものであったせいなのか、アーレント研究のなかではいままでほとんど採り上げられることのなかったテキストでもあ

る。そこで、この機会に詳しくテキストを紹介しながら、解読してみることにしたい。アーレントは、あらためてヤスパースへの感謝の意をあらわしたうえで、つぎのように書きだしている。

ご存知のように、今日ユダヤ人にとってドイツで出版することは、たとえドイツ語を話すユダヤ人の場合であっても容易なことではありません。自分自身の言葉でふたたび書くことができるという誘惑は、それこそがいつも夢に見る亡命からの唯一の帰郷であるにもかかわらず、起こった出来事とくらべたとたんに意味をもたなくなるのです⁽¹⁷⁾。

アーレントは、その「起こったこと」、つまりホロコーストは、通常理解されがちなように「くりかえされる」「既知の」受難なのではなく、新しい出来事であり「決定的な根絶の試み」であるという。しかし彼女が困惑するのは、つぎの点である。ドイツ人とユダヤ人双方のマジョリティの目には、「ヨーロッパの人びとに語ろうとするわたしのユダヤ人は、ルンペンか道化としか見えない」ということである。しかも、確実にそうさせている今日の世界的状況が存在するということでもある。そして、その小さな本に収められたエッセイのどれも「わたしたちの世紀のユダヤ人の運命を意識することなしには書かれていない」が、同時にそのどれにおいても「そうした世界を必然的で、打破しがたいものとして受容してはいない」。自分はそのような「偏見をもたない判断」と「あらゆるファナティズムからの自覚的距離」を、ヤスパースの哲学に負っているという。

わたしがあなたから学んだもの、現実に屈することなく、現実のなかで道を見いだすさいに助けとなったこと。それは、重要なのは真実であって世界観ではないということ、自由に息をし、かつ思考しなければならないこと、それに対して必然性というものは、わたしたちが人間であろうとすることにそれを何らかの役割にすり替えてしまうものであるということでした。わたしが個人的に一度として忘れることがなかったのは、聴くということへの

あなたの言い表しがたい一貫した姿勢、つねに批評の用意のある寛容な精神です⁽¹⁸⁾。

アーレントは、一時期はヤスパースを「話し方にいたるまで」真似しようとしたという。アーレントにとってヤスパースの身ぶりは「底意なしにふるまう人間の象徴」であったからだ。しかし、時代はアーレントに、「底意なしに人間と出会うことがどれほど難しいことになりうるか」、「理性と注意力によるこうしたふるまいが、いかに僭越で凶々しい楽観主義に見えるようなる」かを痛感させた。

わたしたちが今日生きている世界には、事実として、民族のあいだや個人個人のあいだの根本的な不信というものが存在しているからです。その不信はナチスが消滅しても消え去りませんでした。なぜなら、それはわたしたちを圧倒するような経験に基づいているからです。そういう次第で、今日わたしたちユダヤ人は、出会ったドイツ人につぎのような問いをいつも浴びせてしまうことになります。あなたは1933年から1945年までの12年間、何をしていたか、と⁽¹⁹⁾。

ナチスという全体主義体制下においておこなわれた「死体の製造」という「根源悪」が示しているのは、そうした殺害に荷担するためには「生まれながらの殺人者である必要はなく」、体制に同調するためには「金で雇われた共犯者ある必要も、確信的なナチスである必要もなかった」ということであった。アーレントはそうした事実が、ときとしてあやまって、悪としてのドイツ人というかたちの「一般化」を誘発してしまうと指摘する。一方では「組織的犯罪」におけるドイツ人の責任の複雑さ。他方では「ガス室から生まれた、すべてのユダヤ人がもつ憎しみ」。この非対称性を直視したアーレントがとった思考のプロセスは、つぎのようなものであった。

〔鍵となるのは〕、過去に何かが起こり、その起こったことが単純に悪であるとか残酷だということではなく、それがどのような状況にあってもけっして起こってはならなかったのだという洞

察です。これは、まだナチスの支配がある限界をたもっていて、ひとがユダヤ人としてのふるまいを、既知の民族的敵対関係のなかでは有効であった規則にしたがって決めることができたときには、まだ別でした。当時はまだ事実の土俵を非人間的になることなく信頼することができました。すなわち、ユダヤ人として攻撃されたからユダヤ人として自分を守る、というようなことが可能でした。民族的な概念と民族的な帰属がまだ意味をもち、それらは、まだそのなかでひとが動くことができたような現実の起源であり、境地でした。そのような、あらゆる敵対関係にもかかわらずまだ損なわれていない世界のなかでは、民族や個人の間のコミュニケーションは簡単に断絶させられることはありませんでした。そして、ナチスによって行われた事実の結果にさらされたときに抵抗不可能なほどわたしたちを驚づかみにした、永遠なる無言の憎しみはまだ生まれていませんでした⁽²⁰⁾。

ユダヤ人として攻撃されたらユダヤ人として自分を守るというような民族的帰属は、「ガス室」を前にするときには、もはや有効ではない。「アウシュヴィッツで、事実の土俵は、その上に立とうとする者がそのなかに引きずりこまれてしまう深淵に変わりました」。その深淵のなかでは、「リアリティは、さらなる絶滅を遂行することへと人びとを駆り立てる」ものとなった。アーレントは、こうした深淵から遠ざかろうとするとき、そこにはもはや国民も民族もないのだ、ともつけ加える。

事実の土俵が深淵になったなら、ひとがその深淵から遠ざかろうとするとき自分を投げ入れる空間は、いわば空っぽの空間であり、そこにはもはや国民も民族もありません。そこにいるのはただ個々の個人のみであり、その個々人にとっては、マジョリティが何を考えるのかは、それが自分の民族のマジョリティであっても、もはやたいしたことではないのです。今日すべての民族やすべての国民のなかに存在する、これらの個々の人びとのあいだで必要とされる理解にとって重要なのは、自分たちの国民の過去にしがみつかないようにすることです⁽²¹⁾。

「アウシュヴィッツは、ドイツ人の歴史からもユダヤ人の歴史からも説明できない」。個々人として「生き残った者」たちが新しい世界をつくりだすことに彼女は賭ける。そして、語りあうことの可能性のために本を公刊するのだ、と締めくくった。

「わたしたちは生きています」とあなたはジュネーヴでおっしゃいました。「あたかも閉じられたままの扉をたたきながら、その前に立っているかのように。まだ世界を創設していないし、個々の者が存在しているにすぎないけれども、おそらくそうした個々の者が離散ののち出会うときには世界を創設するであろうと思います。そしてそれはすでに、おそらくは今日までごく親密な者同士のあいだで起こっています」と⁽²²⁾。

抑圧からの解放と新しい始まりのあいだには「裂け目」があるとし、自由の創設をうたった『革命について』（1963年）をアーレントはヤスパーズ夫妻に捧げている。アーレントの政治思想と、以上に書きとめてきたようなアーレントの「帰郷」のありかたとは、関連しているにちがいない。しかし、そのことを十分に明らかにするには、さらにまだいくつかの予備的考察作業が必要となる。

注

- (1) スチュアート・ヒューズ『大変貌——社会思想の大移動1930-1965』(荒川幾男・生松敬三訳、みずず書房、1986年)、183頁。
- (2) Hannah Arendt, "The Ex-Communists," in: Id. *Essays in Understanding 1930-1945* (ed. by Jerome Kohn, Harcourt Brace & Company, New York / San Diego / London, 1994), p.400.
- (3) エリザベス・ヤング＝ブルーエル『ハンナ・アーレント伝』(荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳、晶文社、1999年)、374頁。
- (4) Brief von Hannah Arendt an Dorf Sternberger vom 12.7.1948 (Literaturarchiv Marbach).
- (5) Arendt, *Die verborgene Tradition - Acht Essays* (Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1976), p.7.
- (6) アーレント、インタビュー「何が残ったか？母語が残った」(拙訳、『思想』1995年8月号)、159頁。
- (7) Hans Saner, *Karl Jaspers* (Rowohlt, Reinbek bei Hamburg, 1970), pp.43-44.
- (8) *Ibid.*, p.44.
- (9) *Hannah Arendt / Karl Jaspers Briefwechsel 1926 - 1969* (herg. von Lotte Köhler / Hans Saner, Piper, München / Zürich, 1985), p.58.
- (10) *Ibid.*, p.61.
- (11) *Ibid.*, p.58.
- (12) *Hannah Arendt / Kurt Blumenfeld: in keinem Besitz verwurzelt* (herg. von Ingeborg Nordmann / Iris Pilling, Rotbuch Verlag, Hamburg, 1995), p.36.
- (13) *Arendt / Jaspers Briefwechsel*, cit., p.59.
- (14) *Ibid.*, p.65.
- (15) *Ibid.*, pp.67-68.
- (16) *Ibid.*
- (17) Arendt, *Die verborgene Tradition*, cit, p.7.
- (18) *Ibid.*, p.8.
- (19) *Ibid.*, p.9.
- (20) *Ibid.*, pp.9-10.
- (21) *Ibid.*, pp.10-11.
- (22) *Ibid.*